



November 14th 2019

BGN UNESCO NEWS

Bunka Gakuen Nagano Jr. & Sr. High School No 6



2019年 国際ユース作文コンテスト受賞者発表

世界157ヵ国から合計20,657作品から**2名が佳作**に選出！！

テーマ「**優しさがあふれる社会をつくる**」

高校2年 **玉井 沙季 (2-7)** **飯田 陽美 (2-3)**

心の貧困と子ども食堂

玉井 沙季

私はドキュメンタリーを見るのが好きだ。ある日、一人の子どもに密着している番組を見ていた。その子が通っていたのは「子ども食堂」、私は家庭の事情で食料が買えない家の子どもがごはんを食べに行くだけの場所だと思っていた。しかし、番組を見進めていくと、ある子どもの言葉が心にひっかかった。それは、「本当は寂しい。親と一緒にいたいけど親は仕事でいない。」この言葉から私は子ども食堂に来る子は金銭的な貧困だけではなく、心の貧困、に苦しんでいることに気づかされた。

そこで心の貧困について考えてみると、自分も心の貧困を経験しているのかもしれないと思った。私が小学生の頃、お母さんが病気になり、手術をしたりするために入退院を繰り返して、家にいる時間が少なかった。この頃の私はお母さんがいない寂しさと不安で家から離れるのが怖くなってしまい、学校へ行ってもずっと泣いていた。私はこの経験から、心の寂しさから抜け出せず、家から離れる宿泊行事が苦手になってしまい、参加しなくなってしまった。友達には参加しない理由を伝えていなかったため、ときどき誤解をされてしまい傷つくことがあったため、私は友達に理由を打ち明けることにした。すると、友達はしっかりと受けとめてくれて誤解を解くことができた。それから、宿泊行事が近づく友達に「大丈夫だよ。みんな一緒だから!」、「行ける!沙季ならできる!」と励ましてくれたり、サポートしてくれた。そして参加できたときは「できたじゃん!」と言って自信をつけてくれる優しい友達、背中を押してくれる友達がたくさんいた。この心の貧困に苦しんでいた時期を乗り越えることができたのは、周りにいたたくさんの友達の優しさと、側でサポートしてくれた先生のおかげだ。そして今度は、私が心の貧困で苦しんでいる人、寂しい思いをしている人の手助けをする側になりたいと思った。

私ができることは三つ。ひとつめは、相手を受け入れること。友達や学校の先生が私にしてくれたように、相手の話をその人に寄り添って聞くこと。話を聞いてもらえるだけで、不安に思っていることを口に出すだけで心は半分くらい軽くなり、心に余裕ができる。実際に私も、先生や友達に話を聞いてもらっただけで、結構気持ちが楽になったし、話を聞いてくれる人がいるというだけで安心感があった。ふたつめは心の底から笑わせること。笑顔にすること。これは私の考えだが、心の底から笑っているときや笑顔のときは、嫌なこと、悲しいこと、寂しさを忘れることができると思う。マイナスな感情を少しずつ消していけないと、積み重なると大きなストレスになってしまい、気分が落ち込んでしまう。これも実際に私が落ち込んでいるときに友達が笑わせてくれたことで元気がでた。三つめは、ひとつめとふたつめのことを実際に子ども食堂へ行ってみること。子ども食堂へ行ってみると、そこに通っている子どもたちと遊んだりしたいのはもちろん、子どもたちと話して、心の貧困を解決するためのヒントを得たいと思う。

優しさがあふれる社会をつくるためには心の貧困を減らすことが大切だと思う。先生や友達が私にしてくれたように、相手の話を聞いてあげたり、明るく声をかけること、そして笑顔にすること。すごく難しいことではないと思う。相手のことを考えて思いやることができただけで優しい心が育って助けあえる社会ができる。相手と関わるのが苦手な人もいると思うし、私もそうだけど、やらないで後悔するよりも、やって失敗して次に成功する糧にしたい。私ができることからやって優しさがあふれる社会が作れる手助けをする一員になりたい。

国際ユース作文コンテスト

学校奨励賞

2年連続！！

受賞！！

あなたにとって優しさとは何ですか。
どうすれば優しさにあふれる社会をつくっていけると思いますか。

私の思う優しさ

飯田 陽美

優しさは人それぞれ違います。私の思う優しさは、その人の気持ちを理解して、寄り添うことだと思います。私が本当に優しさを感じた体験談を2つしようと思います。

1つ目に、私は生まれてから小学校4年生までの間で、9回の転校をしてきました。別に転校者だったわけではないです。その時その時で、色々な事情で、1年も住まずに引っ越し、転校もありました。そのため人と仲良くなるのが得意になり、馴染めないなんてことはほぼありませんでした。しかし、その反面、別れが惜しいと思わず、涙することなんてそうそうありませんでした。ある小学校で転校が決まりました。転校することをクラスみんなの前で言った時ももちろんみんな悲しんでくれたし、「離れてもずっと友達だよ。」って言うてくれました。でも、すぐにお互い疎遠になるのだろうかと思っていました。当時一番仲良くしていた子には、「あたし今までたくさん転校してきていて、たぶんまた転校すると思う。」と伝えていました。つまりその子には何回も転校していると伝えていたのです。その時一番長くいた小学校で、ほんとに仲が良かった友達でした。今回も忘れられちゃうかな。そう思いました。毎回そうだからです。そこから離れる自分は覚えていても、その場において年月を変わらず過ごしている側は意外と忘れてしまいます。そんなことを思いながら転校しました。しかし、その子は毎年ハガキをくれました。また住所が変わっても送ってくれました。それが来るたびに、ものすごく嬉しかったです。そして思い出がよみがえりました。そして6年越しに2人で会えました。その子の優しさであるその行動や言動のおかげで、その場その場での出会いを大切にしたいと思えるようになりました。

2つ目は、高校に入ってからソフトボールについてです。ソフトボール部は部員が足りず、私は助っ人として大会や、練習に参加していました。でも私は、小学校5年生から、小学校6年生までの約1年間しかやっていなくて、ずっと前からやっていて今も現役の部員の人たちとは比べ物にならないくらい下手でした。でも、部員のみなさんがとてもレベルが高いので、全国大会にコマを進めました。恐縮ながら下手くそな私も行きました。あたしはとても不安でした。「練習についていけるのか?」「足引っ張ってばかりじゃダメだ。」と。あたし以外にも、助っ人として先輩が1人いました。練習も一緒にやりました。先輩も私も練習についていくのにやっとなりました。そして、毎回練習後に、「足を引っ張ることしかできてないじゃん。」「ただの迷惑じゃん。」としか思えなくなりました。全国大会の前日の夜助っ人の先輩のいる前で泣いてしまいました。先輩と二人きりでした。先輩にその時の心情を話しました。そして、先輩も泣いてくれました。「気持ちすごくわかるよ。」と言ってくれました。私はそれがすごく嬉しくて安心しました。先輩も同じ気持ちなのだ。そう思って心強くなりました。そして、泣きつかれてから、先輩が、「やらなきゃだよ。」と言ってくれました。私は自分が決めて助っ人やると決めたから責任持たなきゃ、って思いました。そのあとからミスしても、ずっと引きずるのではなく反省はしてすぐ切り替えるようになりました。先輩の私のために言ってくれた言葉が私を救ってくれました。このやさしさのおかげで、なんでも乗り越えようという考え方に変わりました。

優しさは人それぞれ違います。場面によっても違ってきます。優しさとは相手の気持ちを理解して、寄り添う事だと思います。そうすることで、大きく救われ、考え方が大きく変わることがあります。私は、そのような優しさを与えられるような人になっていきたいです。

裏面

信州つばさプロジェクト×トビタテ!

留学JAPAN 留学フェア2019